行観上人（覚融）について

原　隆政

序論

弘法大師の弟子・真紹（七九七―八七三）が八五五に開創した道場は、後世、永観（ようかん・一〇三三―一一一一）律師が入寺し、念仏道場となった。禅林寺（永観堂）は、浄土宗西山禅林寺派の本拠地・大本山となる。真言宗の寺が、浄土宗西山派に移行するにあたっては、浄土宗に精通する真言宗・静遍（禅林寺十二世・一一六五―一二二三）が係わり、西山上人・証空（一一七七―一二四七・門弟に、浄音、立信、証入、証慧の四人がおり、それぞれの流派を開き西山四流を築いた）にこの寺を託したことに由来する。

第一世証空（或いは証空の弟子・浄音（一二〇一―一二七一））は、関東の多摩川の河辺にある大田区鵜ノ木の光明寺にもその居を置いた。真言宗の文脈とは異なるこうした宗派が発祥したのは、この鵜ノ木光明寺にもみられる。つまり、開創以来真言宗の道場であったとされる光明寺は、第三世行観（覚融）上人（一二四一―一三二五）のとき、浄土宗に成った為、別に、真言宗の寺（山号院号寺号は同じ）を創建した。鵜ノ木の光明寺（大

金山寶幢院光明寺）の下流にある。鵜ノ木光明寺は、浄土宗西山禅林寺派となり、西山上人の流れを引き継ぐことになる。件の上人は覚融とも呼ばれ、後に禅林寺代十九世となった。つまり覚融は歴史上、明らかに存在した人物である。一方、下流に創建された寺（寶幢院）の開創は「行観上人」で、伴の寺にその位牌が存する。別表の通り、年代的には、他の僧とはズレがあり、歴史上、どの様な存在であったのか不明である。

本論

一、覚融の師僧

西山四派の内、浄音の流れに、観智（鵜ノ木光明寺第二世）→行観と系譜する。したがって、証空→浄音→観智→行観と次第する。行観は、浄土宗西山派西谷流の大成者であり、本論三で示す著作を以て業績を残し、京都に移って禅林寺十九世となる。

二、覚融の弟子

下流に創建された寺、寶幢院第二世として実勝法印を据えたが、どういう縁か、経緯かは不明。覚融の人脈がどの様に構成されたのか、その周辺状況を調査する必要がある。

三、覚融の著作

多数の著作があるが、中でも『観経四帖疏私記』二十巻（一三二一）をあげることが出来る。これは『観経疏』を注釈したものであり、他には、『祕鈔』・『鵜木私鈔』・『寶幢院私記』とも呼ばれ、寶幢院（おそらくは鵜ノ木

在住時）で編まれたものとして注目できる。

四、覚融の行状

西山派の法流を盛んにする。一方真言宗の寺が、浄土宗によって無くなってしまうことに対して、鵜ノ木光明寺に代わって寶幢院を建立した。後に京都に戻って禅林寺第十九世となった。

五、文献書誌的な視点から

「覚融（＝行観）」という項目では（『国書総目録』著者p.195）三人居る。

A今般、論じている覚融

B『三部鈔口訣輯考』・『三品悉地之事』・『醍醐口訣』・『大悲代受苦』・『独力本末之事』・『無不非三義分別抄』・『六合釈講林』などを著した人物。一七八八年天明八年八月五日寂。

C『破々抄』六―六六四―四を著した自分物。神道。神道分類目録からのデータとある。

すなわち、以上の文脈から推定すれば、Aの人物が「行観覚融上人」と確認される。行観＝覚融という等号記号が成立する。

六、寶幢院史からの視点

元真言宗寺院・鵜ノ木光明寺は、第三世・覚融（浄土宗）の時に浄土宗へ移行した。その時、覚融は、同様の名前を以て下流に一寺院を建てたという伝えがある。これは、真言宗の寺を残す意図を以て為した業という伝え

となっている。

テクスト中に寶幢院が登場するのは、『北条氏綱印判状』（享禄五（一五三二）年六月二日）であり、足利義晴将軍・後奈良天皇の時代である。この年、法華一揆のあった時代背景がある。

さらに、『本末帳』（一六三二）では、醍醐六流の内地蔵院流（道教方・光台院）が寶幢院に有ることが確認できる。然し乍ら、こうした法流が何時伝わったのかは不明であり、現在この法流に関する事跡は、寶幢院には存在しない。

『四神地名録』（一七九四）に拠れば、本寺（寶幢院）は古義（醍醐）であり、末寺は新義である。そして古義・新義の混在する理由は「不明」とされている。

寶幢院に残るテクストとして梵鐘の銘がある。ここには一六八一年に弁栄がこの梵鐘を作ったことになっている。弁栄の事跡は、近隣寺院安養寺の過去帳に同名僧侶名として示寂（一七四七年八月一日）の記録があり、これが手掛りとなる。

寶幢院を記述するにあたって多くのテクストは、「保元元年示寂の開山行観上人」とするのみで、決して「覚融」という文言を付していないことが注目される。つまり、開山行観上人＝覚融ということが、定着していた。ならば、鵜ノ木光明寺と寶幢院との関係、寶幢院と光台院地蔵院流との関係に於て、かかる不等号を可能にする原因があるものと考えられる。

七、二人の行観上人

歴史上の行観上人を便宜上「覚融」とし、もう一人を「行観」とする。

ここで時間的な流れを整理する。

江戸時代のテクスト中、行観に関する記述に於て保元年間に寶幢院を建立したということになっている。現存する位牌は、六月九日己卯寂である。一一五六年即ち保元一年であり、どういう事情で遷化されたのかは不明だが、わずか六ヶ月で開創したということになる。『日本暦日便覧』（一九八八）によれば、その年（年間日数三八四日）は閏月で調整されている。しかし、閏月は九月であった。

どのくらいの規模を建立したのか、またその原資は何かは不明である。

一一五六年という示寂を信ずれば、行観は自ずと浄音（一二〇一―一二七一）を知る由もなければ、西山派という所属もあり得ない。すなわち覚融とは別人である。

そうした場合、寶幢院の寺号の付与も年代的にはどうであったかをみなければならない。鵜ノ木光明寺と寶幢院は現在山号が異なるだけで、院号・寺号は同じである。頭初の山号は「大金山」であった。

更に、この二人は別人であるとする決め手の記事が『新編武蔵風土記稿』一八二四―八にある。すなわち「（上人即ち行観は）後に埼玉郡大相模の辺へ転住して入滅せり」と。覚融は、京都で示寂している。つまり、寶幢院史記述の中でこの別人であるはずの二人は混同されていることがわかる。

結論に代えて

行観の歴史を解る範囲内で検証してみた。これは、先ず本派・大綱山寶幢院光明寺の開山とされた人物のことであり、その位牌（寶幢院二十八世・良光代一八八一―一九七五を経て現在に至る）には【保元一年六月九日寂】と記されており、一方歴史上の人物である行観覚融上人は【正中二（一三二四）年九月五日寂】という記録にな

っている。寶幢院の寺伝では特に覚融という諱をつけておらず（『武蔵演路』一七八〇も、「開山行観上人」と）、「行観上人」という記述になっている。鵜ノ木光明寺が真言宗から浄土宗へ移行する時、その（多摩川）下流に位置する場所に件の寺・大綱山寶幢院光明寺を開創したという。年号の整合性は無いが、単に事跡としての整合性を重んずれば、鵜ノ木光明寺と大綱山寶幢院光明寺の「行観上人」は、「同一人物」として見ることは可能である。しかし、一六八年もの開きがある記録を科学的にどう判じたら良いのか、疑問が残る。浄土宗西山派の流れの中で、永観律師が一一一一年に寂し、一一五六示寂の「行観上人」と年代的に近い。よって、西山派の成立とその流れという時間的な矛盾がおこり、「覚融」という諱をそのまま「行観上人」と同定することは困難になってくる。おそらくは寺伝における誤写・誤音・誤伝達が途中にあったものと推測される。これを補足する寺伝として、寶幢院第二世・実勝法印（正応四（一二九一）年三月十三日寂）の存在が有り、この寺伝を軸に考えれば、鵜ノ木光明寺の行観覚融上人よりは時代の早い「行観上人」の存在が要請される。仮令え、開山の名前が実際「行観上人」でなくても、要請上の人物が想定され、その示寂が前述の「保元元年六月九日」であれば、（その伝達過程に於てなんらかの誤った情報が混入したとしても）一六八年という開きに整合性を見いだすことはできる。一方、鵜ノ木の光明寺の覚融が、寶幢院を開創したという事跡の整合性は、無くなる。

本論の「二人の行観上人」で記したとおり、西山派の覚融は行観上人ともよばれるが、これほど有名な上人の事跡ならば、寶幢院へのなんらかの関与は疑いが無いと思われる。また、寶幢院開山の上人は、（偶然同名かもしれないが）無名ながらも寶幢院の開創に寄与した人であることは、間違いないと考えられる。

よって、

蛇足ではあるが、こうした寺史あるいは僧伝やその資料を一ケ寺一ケ寺が解る範囲で編んでいくことは、今後重要な意味を帯びてくるはずである。その重要性を三点あげることができる。

一、諸々の目録で公になっているテクストだけで全てを語ることはできず、一人の専門家がそうした未知の資料を全て跋渉することは難しい。

徐々に編まれていく各寺の資料が、少しずつ開陳されていけば、シナプス結合のように（初めは茫洋かもしれないが）、「意味」が構築されていくと考えられる。こうした作業は、インターネットにおいて顕著に評価される百科事典・wikipediaが、その良い例だろう。こうした寺史作りをしていくことで寺院毎の志気もあがるのではないだろうか。

二、日本という滋味豊かな文化をもつ国で、それぞれの地方色豊かな文脈がそうした資料に反映されていることは予想に難くなく、その地域の活性化或いは観光資源を開発していく材料につながっていくはずである。戦後、公の学校で宗教を教えない時代に仏教（という日本に根を下ろした宗教）は、昨今の若者には異文化として捉えられ新鮮で良い刺激として心に届く場面は、マスコミなどでも確認できる。

三、教化という側面で、縁のある寺の歴史を知ることで教師が仏教史に自然になじみを持つようになり、法話作り、檀信徒との話題提供に貢献するものと期待できる。つまり、自分自身が日本の仏教歴史に、あるいは日本の歴史に少しでも関与していく（或いは関与しているという）動機作りに最適であろう。

別表

真紹	永観	静遍	証空	浄音	行観	覚融	実勝
797							
|							
873							
	1033						
	|				?		
	1111				|		
					1156		
		1165					
		|	1177				
		1223	|	1201			
			1247	|		1241	1241
				1271		|	|
						|	1291
						1325	